早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨
3388-2

ジュチ裔諸政権史の研究

赤坂恒明

概　　要

W
学位論文
3388
2

ジュチ裔諸政権史の研究

赤坂恒明

概要

西暦 1206 年、モンゴル高原においてチンギス・ハンが即位し、モンゴル帝国を建設した。この時、チンギス・ハンは、自身の諸子・諸弟に民を分かち与えた。長男ジュチには四つの千戸が与えられ、アルタイ山脈の西麓、イルティシュ川上流域を遊牧地として、ジュチ・ウルス即ちジュチの「くに」が成立した。ジュチの跡を継いだ二男バトは有名な東ヨーロッパ遠征を行い、ジュチ・ウルスは、中央アジアから東ヨーロッパにまで及ぶ広大な領域を支配し、モンゴル帝国の西北部を構成した。十四世紀前半、ウズベク・ハンの時代にイスラーム化したジュチ・ウルスは、モンゴル帝国の崩壊後も内陸ユーラシア西北部において絶対的な強勢を保ちつづけた。しかし、十五世紀以降、いくつかの地方政権に分裂した。

ジュチ裔諸政権 ―― ジュチ・ウルスと、その分裂に伴って成立した、ジュチ裔を頂く諸政権をも包括した総称として、本研究において使用する ―― の歴史を研究することは、モンゴル帝国を理解するために不可欠であるのみならず、内陸ユーラシアにおける民族形成やロシア帝国の歴史を正しく認識する上でも重要である。即ち、ジュチ・ウルスは、モンゴル帝国の西北部分を構成する重要な要素であるにもかかわらず、その実態には未詳の点が多い。また、ジュチ・ウルスの分裂に伴って成立した諸政権の多くは、結果的に、内陸ユーラシア西部のイスラーム系諸民族のうち人口で上位三位までを占める諸民族 ―― ウズベク、カザフ、タタール ―― の形成に大きな影響を与えている。また、ジュチ・ウルスは、特にロシア史上において「金帳汗国」または「キプチャク汗国」の名のもとに呼ばれ、ロシアの地を「タタールのくびき」と呼ばれる圧政下に置いたとされ、ロシア社会に大きな影響を与えた、ということでも知られている。

このように、さまざまな面においてジュチ裔諸政権史を研究することの重要性が認められており、関連する研究は数多く存在している。しかし、ジュチ後裔諸政権については、実は、王統の系譜、政権・集団の名称・実態・概念などと言った、ごく基礎的な史実さえ

未だに明らかにはされていないという状況にある。そこで、本研究においては、「ジュチ裔諸政権を如何なるものと捉えるか」という問題意識のもとに、これらの基礎的な諸問題を専ら同時代史料に基づいて論じた。

まず、第一章・第二章においては、ジュチ裔の諸王統について分析した。即ち、(1)モンゴル帝国イラン（イル汗国）において編纂されたペルシア語史料であるラシードッディーンの『集史』、(2)ラシードッディーンによる『集史』編纂事業の一環として編纂されたペルシア語系譜集『五族譜』、(3)チムール朝期に編纂されたペルシア語によるモンゴル王統系譜集『ムイッズル・アンサーブ』、(4)十六世紀初めに中央アジア南部において編纂されたチャガタイ=テュルク語史料『勝利の書なる選ばれたる諸史』、の各史料には、ジュチ裔の網羅的な系譜情報が伝えられている。これらの諸史料の史料的価値については既に一定の評価が得られてはいるが、その系譜情報について、諸写本の段階にまで掘り下げた詳細な分析を行った。特に、『勝利の書なる選ばれたる諸史』については、ジュチ・ウルスの分裂に伴って各地に成立した諸政権の初期の王統を同時代的に伝える系譜情報として高い史料価値があるということが確認された。これらの諸史料における系譜情報のなかには、史料間また写本間において、一見、相矛盾しているかのように見えるものもあるが、それらを、想定される原資料の段階にまで遡って批判・検討することによって、それらの系譜情報を統合・復元することが可能であることを明らかにした。このようにして、従来の通説においてしばしば誤りが含まれていたジュチ裔の諸王統の系譜 ―― 特に、オロス・ハンの出自とテムル・クトルクの出自（共にジュチの十三男トカ・テムルの後裔）―― については、ほぼこれを確定することができたものと思われる。

また、『勝利の書なる選ばれたる諸史』は、このように重要な系譜情報が収められているものの、そこに初出するモンゴル帝国期に関する記述については、史料性の点で問題があることを指摘した。本書をも含め、後世において、ジュチ裔諸政権のうちのある特定の家系に属する君主によって統治された政権のもとで編纂された史料には、編纂時の同時代的な情況を、過去のモンゴル帝国期にまで遡及して投影したものが多く、政治的に偏向している傾向が著しく強いということを確認することができた。ここに、モンゴル帝国期におけるジュチ・ウルスの歴史を研究するためには、このような後世の史料に初出するような記述は原則として使用すべきではなく、基本的には同時代資料に基づくべきである、という至極当然な事実を再確認した。

次いで、第三章では、成立期から十四世紀前半にかけてのジュチ・ウルスについて、特にその下部構成要素である左翼と右翼について、各々考察を行った。

左翼（オルダ・ウルス）は、モンゴル帝国全体の動向にさえ一定の影響を及ぼしていた程、重要な役割を演じ、ジュチ・ウルスという枠内には収まりきらないような独自の存在感さえ示していたことが確認された。しかし、このジュチ・ウルス左翼の活動は、ジュチ家宗主の意向に反していたものではなかった。従来より、ジュチ家とフビライ家（元朝）との間には敵対的な関係が続いていたと考えられることが少なくなかったが、そのような考え方が当を得たものであるとは考えられない。よって、ジュチ家とフビライ家との敵対関係を前提としてジュチ・ウルス左翼の活動の独自性を強調するのは問題であろう。

一方、右翼については、十三世紀末〜十四世紀初のジュチ家宗主トクタによる右翼の併合と、その旧領の没収・再分割について検討した。このトクタによるジュチ・ウルス西部の再編成によって、ジュチ・ウルスは、従来の「小モンゴル帝国」的構造 ―― 中央ウルスを中心に、東西に左右両翼を配する ―― が解体され、西部（右翼。ジュチ家宗主）と東部（左翼）から成る構造へと転換し、ここにジュチ・ウルスの内部構造は大きな変容を被った、ということを確認することができた。

第四章では、まず、「ウズベク」という集団名が、ジュチ家宗主ウズベク・ハンの名に由来し、イスラーム化後のジュチ・ウルス即ちジュチ裔諸政権を構成する諸集団の総称として、十四世紀中葉から十六世紀初に至るまで用いられていた、ということを論証した。従って、十四世紀後半から十五世紀頃にキプチャク草原の東部に「ウズベク」という新しい遊牧民集団 ―― 所謂「遊牧ウズベク族」―― が形成され、シバン（ジュチの五男）裔のアブール・ハイル・ハンのもとに統一政権「遊牧ウズベク国家」を樹立した、とする従来の通説には従い難い。アブール・ハイル・ハンの政権は、あくまでも、「ウズベク」の名で呼ばれたジュチ裔諸政権のうちの一政権と位置づけるべきであると考えられる。また、ウズベク・ハンの名が集団名「ウズベク」として用いられるようになった背景としては、ウズベク・ハンのもとでジュチ・ウルスのイスラーム化が完成した、または、完成したと見做されていた、という事実を指摘することができる。

そして、最後に、ジュチ・ウルスおよびジュチ裔諸政権に対する呼称としての「金帳汗国」なるものの概念について検討した。その結果、バトを初代の君主とする「金帳汗国」

という政権は、「ロシアにおけるモンゴル人」即ち「[モンゴル=] タタール人」の王朝として位置づけられたものであり、ロシアを主体とした一方的な視点からジュチ・ウルスを対象化した研究上の概念に過ぎず、ジュチ・ウルスの本質、同時代的な実態から大きく懸け離れたものであるということが明らかとなった。一方、東方イスラーム世界 ―― イラン地域、中央アジア方面 ―― においては、所謂「カザフ汗国」の君主たちをジュチ・ウルスの正統と認識する事例が存在する、ということを確認した。ここに、ロシア中心史観に基づいて、ジュチ・ウルスおよびジュチ裔諸政権の西部の動向によって主に構成された「金帳汗国」という政権の枠組が、ジュチ裔諸政権を総合的に理解するための概念として適切であるとは言い難いことが明らかとなった。従って、我々は、この「金帳汗国」という政治的枠組を解体して、キプチャク草原の東西におけるジュチ裔諸政権の歴史を再構成する必要がある。

以上の検討・考察によって導き出された諸点に注意しつつ、ジュチ裔諸政権の歴史の流れを再確認すると、凡そ次の通りとなる。

まず、チンギス・ハンが長男ジュチへ分民してジュチ・ウルスが成立したことによって始まったジュチ裔諸政権の歴史は、十四世紀前半に大きな画期を迎えたと言うことができるものと思われる。即ち、ジュチ家宗主トクタによってジュチ・ウルスの内部構造が再編成され、彼の次にジュチ家宗主となったウズベク・ハンは、それまで独立性の高かった左翼をも自己の統制下に置いて、ジュチ・ウルスの統一を事実上成し遂げた。また、このウズベク・ハンの時代に、ジュチ・ウルスは、本格的なイスラーム化によって、モンゴル帝国の北西部を占める一政権としての存在から、イスラーム世界北部における一大勢力へと、質的にも変化を被った。イスラーム化後のジュチ・ウルスの総称として「ウズベク」という称が用いられるようになったことは、まさにこのような十四世紀前半におけるジュチ裔諸政権の変質と関係があるのではないかと思われる。

十四世紀後半、ジュチ家宗主のバト家が、ウズベク・ハンの子ジャーニーベクの子の世代で断絶すると、代わって、シバン裔と、左翼系のトカ・テムル裔を中心とする王族たちが、ジュチ家宗主の地位をめぐって分裂・抗争を繰り返した。一時、トカ・テムル裔のトクタミシュによって再統一が行われてはいるが、結局、再び分裂状態に陥った。この分裂期のキプチャク草原においては、いくつかの王統に出自する王族たちによって君主位の交替が頻繁に行われたが、それらの君主たちを、何らかの基準に即して一人一人年代順に並

べ、ジュチ・ウルスの歴代君主として列挙してみたところで、あまり有益ではないように思われる。というのは、これらのジュチ裔の王族たちは、各々が ある特定の集団に擁立されて抗争を繰り返していた、というのが実態に近かったと考えられるからである。彼らが皆ジュチ裔の王族であったために、表面上はジュチ・ウルスの「正統」政権が、ジュチ以来、代々継続しているかのように見える（諸史料においても、まさにそのように叙述されている）わけであるが、実際には、十四世紀後半以降、連続したジュチ・ウルスの「正統」政権の存在を想定すること自体が無理であるように思われる。

このような各王統の分裂・抗争の状態は、十五世紀以降、ある特定の王統のもとに いくつかの地方政権が確立してジュチ・ウルスが再編成されることによって、ある程度の固定を見た。

即ち、ジュチ・ウルスの西半では、ヴォルガ川下流域のアストラハンとその周辺の草原地帯を本拠地とした小ムハンマド（テムル・クトルクの孫）裔の諸政権 ―― 所謂「大帳」「アストラハン汗国」―― と、トクタミシュに比較的近い一族によって建てられたカザン政権とクリミア政権 ―― 所謂「カザン汗国」と「クリミア汗国」―― が、各々成立した。東半では、カザフ諸集団が成立し、多少の曲折はありながらも、その勢力を拡大していった。一方、シバン裔の王族たちは、トカ・テムル裔に逐われるような形で南下して周縁地域に移り、中央アジア定住地帯において都市の支配者となり、ホラズム地方とマー・ワラー・アンナフル地方に各々政権 ―― 所謂「ヒヴァ汗国」と「シャイバーニー朝」―― を建てた。また、シバン裔の一部は、ウラル方面から西シベリア南部へと進出した ―― のちの「シベリア汗国」――。

ジュチ裔諸政権の歴史を研究するためには、さまざまな視点が重層的に存在しており、未解決の問題がまだまだ数多く残されている。本研究では、専ら、同時代史料に基づいた史実の再構築を試みることによって、モンゴル帝国期以降の内陸ユーラシア史を研究するための新しい指針を示すことはできたのではないかと思われる。